

## ひな人形の起源

平安時代、貴族の子女の間で紙の人形を使ったままごと遊びが盛んになりました。当時は人形のことを「ひいな」と呼んでいたそうです。

また、当時、三月の初めの巳(み)の日には、無病息災を願っておはらいをする「上巳(じょうし)の節句」が行われていました。この日には陰陽師(占い師)を呼んでお祈りをささげ、紙や草木で作った人形にお酒や供物を添えて自分の身代わりとして川や海へ流したそうです。

この二つが結びつき、現在のひな祭りの原型になったといわれています。



## 鯉のぼりの起源

鯉のぼりは江戸時代に始まったといわれる日本独自の風習ですが、中国に古くから伝わる伝説がもとになっています。

中国の黄河上流には、激流が重なった竜門といわれる難所があり、そこを登り切った鯉は竜になれるという登竜門伝説があります。この登竜門伝説にあやかり、男の子が生まれたお祝いと、強くたくましく育て欲しいとの願いを込めて、鯉のぼりを空高く掲げるようになりました。



## ご存知ですか!? 節句用品豆知識

左が現代風で、右が昔風です。微妙な違いがお分かりいただけますでしょうか。



ひな人形の顔をじっくりとご覧になられたことはありますか。一見すると全て同じように見える人形の顔立ちですが、実は大きく分けると二つの系統があるのです。

一つは顎のラインが細く、鼻筋も通った現代的な顔立ち。もう一つは顎も丸めで、全体的にふっくらとした昔風の顔。さらにその中間のものもあるそうです。お店で色々見比べてみるのも面白いのではないのでしょうか。

ちなみに現代風の顔は関東で、昔風の顔は関西で人気があるそうです。



金太郎入りの鯉のぼりは現在でも人気があります。

鯉のぼりの図柄は、生産地によってさまざまな特徴がありますが、加東市のものは豪華さが大きな特徴です。

筆で描いていた時代から、胴体のど真ん中に注文家の家紋や金太郎を入れたり、当時としては鯉のぼりに使うことが非常に珍しかった金色を「笹金入り」の名前で使って高い評価を得、今でも特に関西で大変な人気を誇るそうです。

ですが、今までに無い模様や手触りを実現できるため、衣装の選択肢が広がります。

また、鯉のぼり作りで培ってきた技術は、神社やお祭りなどで使われるのぼり旗の生産に生かされています。のぼり旗は機械で印刷することもできるのですが、機械では片面しか刷ることができません。しかし、鯉のぼり作りと同じように型枠を用いることで、両面に図柄を刷ることができるようになりました。また、刷る枚数が多くなればなるほど、機械に比べて安く生産することが可能になります。

このように、節句用品作りの新たな可能性は今、大きく広がっています。

節句用品作りの長い歴史の中には、戦争による物資不足などで生産が中断するなど、大変な時期もあつたようです。それでも先人たちの努力によって現在まで受け継がれ、加東市を代表する地場産業となりました。

これからは、先人たちが築き上げてきた伝統をもとに、新しい創意と工夫で、より良い製品が生み出されていくことでしょう。そして、節句という日本の伝統文化とともに、次の世代へと引き継がれていくことを願っています。

## 節句用品作りにかける私の思い



播州節句人形鯉職協会 出井和典さん



播州節句人形鯉職協会 柴崎彰孝さん

少子化や住宅事情の変化など、節句用品の生産を取り巻く環境は年々厳しくなっています。しかし、だからこそ長年培ってきた技術をもとに、新しい要素を積極的に取り入れていきたいと思っています。

はじめて扱う生地や材料から完成形を想像するのは非常に難しいのですが、そこにモノづくりの面白さもあります。「本物」にこだわり、長く使える良いものを作り続けたいですね。

また、昔は祖父・祖母が孫にひな人形を贈り、家族全員で節句のお祝いをすることで、子どもたちは昔から伝わる風習や伝統を習うことができました。しかし、核家族化が進んだ現代では、子どもたちがそういったものに触れる機会がどんどん減ってしまっているようです。ひな人形作りを通じて、子どもたちに伝統の大切さを伝えることで、日本文化の一端を担ってほしいと思います。

鯉のぼり作りは、昔と違って手描きではなくなりました。工程の大半は今も手作業で行っているため、経験と技術が必要です。たとえば、蒸気窯で蒸す工程では、その日の天気や気温そして染料の色によっても蒸す時間が変わってきますので、長年の経験がものをいいます。

また、染色の工程では熱を用いるので、特に夏場は大変な作業です。しかし、白地の部分を汚すと台無しになってしまつたため、涼しい季節に作り置きしておくこともできないのです。

このように手間ひまかけて作る加東市の鯉のぼりは、筆書きをしていた頃から続く、写実的で豪華なデザインが大きな特徴です。これはこの地に優れた職人職人がおられたからであり、他の地域にはなかなか無いものだと思っています。今に受け継がれた伝統の技術で格調高い鯉のぼりを全国に届け、その技を後世に伝えていきたいです。

このようにして始められた節句用品作りですが、現在まで100年以上も続く伝統産業となりました。では、その要因は一体どこにあったのでしょうか。

### ひな人形にまつわる縁

ひな人形作りが東条地域で盛んになった理由として、ひな人形職人の出井和典さんは「人形作りに最適な材料が、たまたま身近にあったことが、大きな要因の一つではないか」と話されます。

例えば、ひな人形の胴体は稲わらから作られるのですが、東条地域特産の酒米「山田錦」の長くて柔らかい稲穂が、人形作りに非常に適しているそうです。また、胴体に手足を付けるために針金を用いるのですが、それに必要な真っ直ぐの針金というものはあまり無いそうです。しかし、同じ東条地域を代表する地場産業の釣針は、真っ直ぐな針金から作られています。これをそのままひな人形作りに利用することで、針金を加工する手間を省くことができるのです。

ひな人形作りは、東条地域全体で育まれてきたものであるということができそうです。



型枠を用いた「捺染染め」。この製法により大量生産が可能となりました。



### 独自の製法とともに

鯉のぼり作りについては、型枠を用いて布にプリントをする「捺染染め(なっせんぞめ)」と呼ばれる技法によってシェアを拡大できたことが、この地に広まった大きな理由でしょう。

鯉のぼりが作られ始めた明治時代には、和紙に鯉を1匹ずつ筆で描いていましたが、大正時代に入つた頃、素材に布を用いるようになりまし。布に変わった当初は和紙と同じように手描きしていたのですが、やがて

### 節句用品作りの現状と新しい取り組み

節句用品の生産量は、少子化の影響などで減少傾向にありましたが、新しい素材を用いたり、技術を他の製品に応用するなど動きもみられます。

例えば、ひな人形の衣装に用いる生地は、従来からの人形衣装専門の業者のほかに、最近ではネクタイ業者や丹後ちりめん職人さんにも織ってもらつたりするそうです。これまでとは素材も織り方も違つたので、色柄の調整が非常に難しいとのこと



ネクタイ生地から作った衣装。独特の色柄が魅力です。